

増、一種紅花ノ者アリ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、高二三尺莖弱クシテ直立セズ、葉莖ニ兩兩相對ス、葉ノ形尋常ノモノヨリ微大ニシテ、長サ三寸幅一尺五六分ニモ及ブ、深綠色ニシテ面背共ニ毛ナシ、三四月梢葉間ニ枝又ヲ分チ、五瓣ニシテ、淡紅色ノ花ヲ開ク、中ニ黃蕊アリ、花後實ヲ結バズ、根ハ白色ニシテ硬ク長シ、

〔古今要覽稿草木〕いよかづら 藍漆

いよかづら、一名からすのひるつるは、漢名を藍漆一名藍藤といふ、これ即唐本草にはゆる白前の一種にして、その苗春宿根より生じて蔓をなし、小樹をまとふ、葉の形頗る女青に似て、稍長く兩々相對し、秋に至れば、その梢葉の間に小又枝をわかれて、徐長卿に似たる五瓣の紫黒花を開き、後細長角を結ぶ、また徐長卿角の如し、其根は數條簇生し、狀細辛に似てや、粗にして且長し、扱藍漆は古より今に至りて、其種何物たる事をしるものなかりしに、今以て藍藤となすものは、東醫寶鑑に、藍藤根處處有之、根如細辛、即今藍漆也、性温味辛無毒、主上氣冷嗽、煮服之といへるは、本草拾遺に、藍藤生新羅國、根如細辛、味辛無毒、主冷氣咳嗽、煮汁服之といへる、兩說符節を合せたるが如くなるによりて也、されば藍漆藍藤は即一物なる事明かなりといへども、天平のむかし、出雲國意宇郡島根郡以下の五郡に産し、延喜の比に、伊勢尾張以下の二十八箇國より貢せし、その草木はいかなる物なるべきか、さらにわきまへざりしが、此比千金方藥注を讀みて、漸くに明白になりしなり、白前の一種いよかづらとなすものは、唐本草に白前葉似柳、或似芫花、苗高尺許、生洲渚沙磧之上、根長於細辛、味甘、俗以酒漬服、主上氣、不生近道、俗名石藍、又名嗽藥、今用蔓生者、味苦非真也、按に藍漆藍藤は既に味辛とみへたるに、こゝに蔓生のもの味苦といふ時は、其物の異なるやうにもおもはるれど、これは風土によりて、その味のたがひはある事にて、こゝには白前味甘とみえたれども、藥性論といへるによりて也、○中

釋名